

氏名（本籍）	寺田 千栄子（鹿児島県）	
学位の種類	博士（保健福祉学）	
学位番号	甲第 57 号	
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 31 日	
学位授与の要件	久留米大学大学院学則第 14 条 1 項第 2 号による	
学位論文題目	エンパワメント視点に基づく LGBTQ の子ども達への 学校ソーシャルワーク研究	
論文審査委員会	主査 久留米大学教授	門田光司
	副査 久留米大学教授	辻丸秀策
	副査 久留米大学教授	鬼崎信好

## 論文内容の要旨・要約

### 本研究の目的と基本的な視点

わが国では、2003（平成 15）年に「性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律」が制定され、学校における性同一性障害に係る児童生徒への対応についても必要性が認識されるようになった。そして、2014（平成 26）年に、文部科学省は学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査を公表し、学校教育現場における LGBTQ（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Questioning）の子ども達への支援が注目され始めた。さらに、2015（平成 27）年 4 月 30 日に、文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施などについて」を通知しました。

このように、LGBTQ に関する理解啓発は進みつつあるが、わが国では LGBTQ に関する先行研究は多くはなく、LGBTQ の子ども達への支援に焦点をあてた学校ソーシャルワーク実践の研究も行われてはいない。そこで、本研究は、わが国の学校教育環境における LGBTQ をはじめとした多様なセクシュアリティの子ども達への学校ソーシャルワークの必要性及び視点を示し、有効な実践モデルを検討していくことにある。この研究目的を達成するために、次の 5 点について検討した。①わが国において LGBTQ の子ども達を取り巻く環境を明らかにする。②学校教育環境における支援の実態と課題を示す。③当事者が実際に学校教育環境においてどのような困難を抱えていたのかを示す。④学校ソーシ

ャルワークの必要性を検討する。⑤有効な支援モデルを検討することである。

## 本研究の内容

本章では、LGBTQ、セクシュアリティ等四つの用語について説明し、本論文におけるLGBTQの定義を明確にした。各章の内容は以下の通りである。

第1章では、わが国におけるLGBTQの子ども達の先行研究の到達点を整理している。また、先行する北米での先行研究を提示した。まず、わが国のLGBTQに関する先行研究は多くはなく、主に4つの領域に分けることができる。第1に精神医学に関する領域、第2に心理的支援に関する領域、第3に人権に関する領域、第4に学校教育に関する領域である。そして、各領域での研究の到達点と課題を整理した。LGBTQへの子ども達の支援に関する先行研究の課題から、LGBTQの子ども達を取り巻く学校教育環境の整備は極めて重要な課題であることが示された。この点において個と環境の相互作用に働きかける学校ソーシャルワークの使命は大きなものと考えられるが、わが国において社会福祉分野でのLGBTQ研究は皆無であり、学校ソーシャルワークに関する支援研究は全く行われていない実態がある。本研究はこの課題に対して、開拓的先駆的に取り組む研究であると言える。他方、北米ではLGBTQの子ども達が安全な環境下でないことに対して、学校におけるソーシャルワークに関する研究が積極的になされている事を示した。

第2章では、わが国の学校教育環境におけるLGBTQの子ども達たちへの支援状況とその課題を量的に把握することを目的に全国調査を実施した。調査は、全国の小中学校、高等学校を対象とした自計式調査を実施した。回答者は、業務内容からすべての児童・生徒の支援に携わる可能性が高い養護教諭とした。調査時期は平成29年6月～7月である。本研究の趣旨および倫理上の配慮を質問紙上に明記し、分析はSPSS 24.0およびSPSS Text Analyticsを使用し、統計的処理を行った。

調査結果では、子ども達は学校生活の諸場面や心理面、恋愛や異性への感情に関することを多く相談しており、学校教育現場では相談内容に対して個別に対応していることが明らかになった。また、養護教諭は物理的な配慮に止まらず、校内の体制づくりや教職員の理解促進・意識統一が必要であると考えていた。加えて、学校教育現場にはスティグマをはじめとした子ども達を抑圧する構造が存在し、子ども達のパワーの欠如につながっていることを示した。また学校教育現場の課題としては、①早期支援が行われていない、②学校教育現場は

当事者にとって相談しやすい環境にない、③養護教諭は学校全体への働きかけを積極的にできていないことが明らかになった。

これらの課題の解決においては、「個と環境の相互作用」に働きかけていくことが重要であり、スクールソーシャルワーカーの活用の可能性について示した。ソーシャルワークの専門的価値基盤である人権、社会正義、多様性の尊重の観点から、学校ソーシャルワーク実践が必要であり、とりわけパワーの欠如についてはエンパワメント理論の導入が有効であると考えられた。

第3章では、20代のLGBTQの当事者が学齢時期にどのような支援への潜在的ニーズを持っているかを質的に把握することを試みた。調査は、12名の当事者を対象として、半構造化されたインタビューを採用した。対象者は、当事者団体に所属する大学生とし、自らの小学校、中学校、高等学校時代を振り返った経験からの回答を依頼した。調査時期は平成29年7月～11月である。なお、対象者にはインフォームドコンセントを行い、辞退する権利や守秘義務、説明責任などを明確に伝えるなど、倫理的配慮を十分に行った。本調査では、当事者の許可を得てICレコーダーによる録音を行う。データ分析は、Nvivoを活用した内容分析を行った。調査結果では、LGBTQ当事者のパワーを減退させたり、またパワートを促す要因について明らかにした。学校においては、パワーの減退をさせる要因は取り除き、パワートを促す要因を増やしていくようなソーシャルワークの実践が必要であると考えられた。実践者になりうるスクールソーシャルワーカーは、これらのパワーの減退のプロセスを理解した上で実践を行っていくことが望まれた。

第4章は、エンパワメントの概念について整理を行った上で、エンパワメント視点に基づく学校ソーシャルワーク支援の必要性について述べた。本論文での調査結果より、わが国の学校教育環境はLGBTQの子ども達にとってパワーの欠如へとつながる環境であることが示され、この状況から回復し、パワーを強化していくことが望まれた。そのためには、わが国の学校教育現場において、LGBTGの子ども達への環境改善ではエンパワメント視点による学校ソーシャルワーク実践を行なっていくことが望ましい。加えて、学校教育現場においてはLGBTQの子ども達に対して、小学校での早い段階から支持的・受容的で安全な環境を整備することも必要であり、その支援体制の構築にも学校全体で取り組んでいくことが重要である。また、LGBTQの子ども達が抱えている問題を個人の能力やパーソナリティに帰す問題として取り組んで行くのではなく、社会システムや生態学的視点から問題を捉え、多次元モデルでソーシャルワークを展開していくことが必要である。そして、これらの実践者であるスクールソーシャルワーカーへの期待は

大きいと考えられた。以上から、本章では、LGBTQ の子ども達のパワーの欠如につながる構図(図1)及び学校教育現場において LGBTQ の子どもたちを取り巻くパワーの関係図(図2)を以下のように示し、エンパワメント視点のソーシャルワーク実践の基盤として示した。

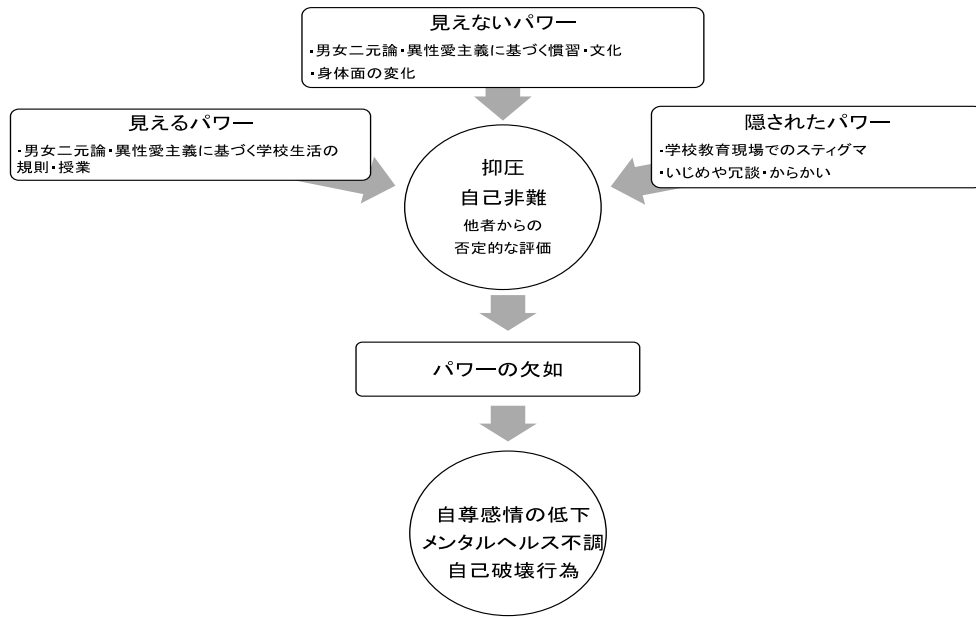


図1 学校教育現場に存在するネガティブなパワーとパワーの欠如をもたらす構図

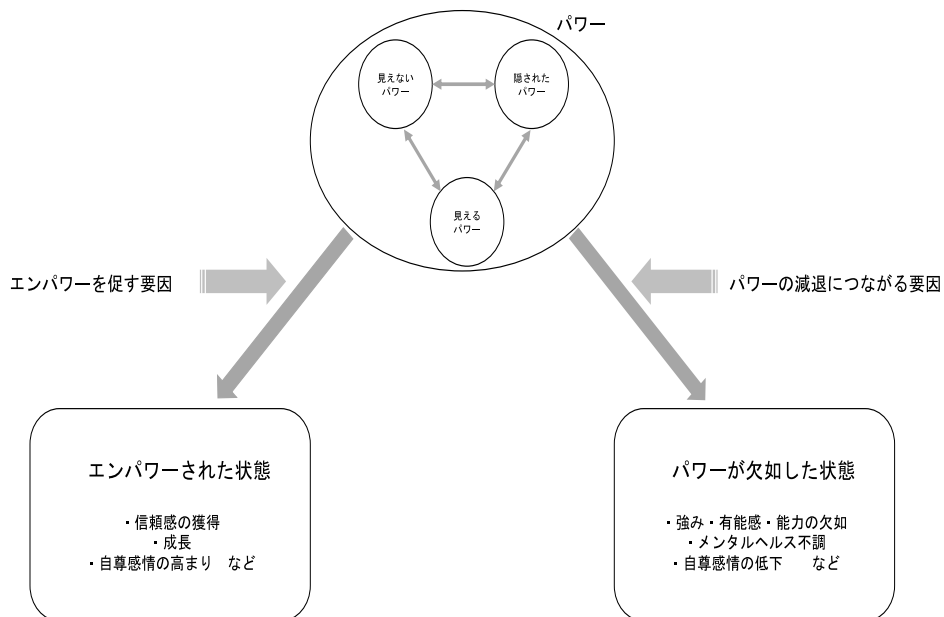


図2 学校教育現場において LGBTQ の子ども達を取り巻くパワーの関係図

終章では、エンパワメント視点に基づく学校ソーシャルワーク実践モデルを構想した。また、その実践者としてのスクールソーシャルワーカーの役割についても検討した。表 1 は、わが国の文化的背景を考慮し、LGBTQ の子どもに対する学校ソーシャルワーク実践を行うにあたり、スクールソーシャルワーカーが必要とする技術をまとめたものである。

表 1 . わが国の LGBTQ の子どもへの学校ソーシャルワークによる支援方法

ソーシャルワーク実践で求められる専門性		具体的な支援方法
支援において必要な知識	適切な言葉の使用	LGBTQ への差別的な表現は是正し、肯定的で正しい意味の言葉を使用する。学校現場には無意識的に男女二分する表現も多く、表現の検討をする。一人称や呼ばれ方については、本人の意思を尊重する。
	人口統計と性の多様性の知識	我が国におけるLGBTQの統計的理解をし、セクシュアリティの多様性に関する知識を得る。
	シンボル、歴史的な日にちや数字	我が国の当事者への権利擁護に対する動向を知る。また、レインボーカラーのような当事者のシンボルを理解しておく。
	当事者に衝撃を与えた事件	いじめや自殺念慮など当事者が陥りやすい状況やそれに伴う事件を理解しておく。
	社会資源	当事者を支援する団体、家族を支援する団体、取得が有利な資格や奨学金など、利用できる社会資源についての情報を持つておく。
	文化的配慮がなされている実践モデル	これまでの文化的配慮がなされた実践の構成要素を知る。我が国においては、まだまだ実践が少なく実証的研究の蓄積も重要である。
	アイデンティティの発達段階とカミングアウト	アイデンティティの発達段階を理解し、そこに生じやすい課題を理解しておく。カミングアウトについては本人の意思を尊重する。
支援技術の開発	当事者にとって安全な環境を作る	学校内に気軽に足を運ぶことが出来る安全な環境(Safe Space)を作る。学校現場でのLGBTQの理解の普及に努め、校内の体制づくりをする。
	性的指向を決めつけない	セクシュアリティは多様であることを前提とし、個別理解を計る。
	カミングアウトまでの過程を通しての当事者支援	カミングアウトをするか否かを当事者が自己決定できるよう知識や情報の提供など手助けを行う。
	カミングアウトの過程の理解し、当事者の周囲の人的環境に働きかける	カミングアウトには様々な葛藤や不安があることを理解し、カミングアウトすることを自己決定するまでの過程についても理解しておく。また、周囲との関係性など、環境を把握しておく。
	当事者理解	否定的な経験や葛藤を踏まえた、当事者の理解を計る。
	家族支援	家族が当事者のセクシュアリティに関する自己決定を肯定的に受け止めることが出来るよう支援を行う。その際に生じる、家族の葛藤や懸念も想定しておく。
	情報の活用	インターネットなどの普及により、真偽が不明な様々な情報を当事者が得ることが出来る状況を理解しておく。本人にとって有益な情報を選択できるよう、支援を行う。
	スティグマに対する働きかけ	学校現場に存在するLGBTQへの偏見や無理解を理解し、LGBTQの理解の普及に努め、校内の体制づくりをする。
	研修や新人教育	LGBTQに関する知識や支援において、研修の機会などを通じアドボカシーを行う。

また、わが国の学校教育環境における支援課題と照らし合わせて検討したスクールソーシャルワーカーの役割としては、①学校教育現場において LGBTQ の子ども達のアドボカシーを行う実践者としての役割、②子ども達が相談しやすい環境を作る実践者としての役割、③子ども達の居場所づくりを行う実践者としての役割、④学校内外の支援体制を構築する実践者としての役割、⑤教員に対する支援を行う実践者としての役割、などである。これらの役割を踏まえ、スクールソーシャルワーカーの価値基盤である子どもの人権と社会正義、多様性の尊重に基づき検討した支援内容を表2に示した。

表 2. エンパワメント視点に基づく学校ソーシャルワーク実践モデル

介入の次元	ミクロ		メゾ	マクロ	
	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元	
焦点	ニーズ・資源のアセスメント SSW・当事者(LGBTQの子ども)との関係構築 当面のニーズの充足	問題克服のためのスキルの習得 セルフヘルプ	資源の確保 システムのアセスメント	ソーシャル・アクション 政治的(マクロ)変化	
基本的な参加者	当事者・家族・SSW	当事者・家族・LGBTQのグループ(校内)・SSW	当事者・家族・LGBTQのグループ(校外)・問題に焦点を当てたネットワーク	当事者・家族・LGBTQのグループ(校外)・地域・全国団体	
基本的な変革の目標	当事者・家族	LGBTQの子どもの状況・「共通の問題解決」	学級・学校・当事者・「共通の問題」	LGBTQのグループ(校外)・地域・法律・政策・市区町村・都道府県・国	
具体的な支援内容	制服やトイレなど、当事者のニーズに沿った物理的配慮を行う	共通の問題や解決に取り組むためのLGBTQの子どものグループ等を組織・活用する	男女二分論、異性愛主義を前提としない、多様な性を包括する仕組みづくり	男女二分論、異性愛主義によらないなど、多様な性を包括する仕組みづくり	
	SSWと当事者との関係構築を開始する		LGBTQの子どもたちが安心できる場を校内に作る		当事者たちが安心できる場をつくる
	LGBTQに関して情報を得ることを通じて、当事者の自己肯定力を高まりを促す	LGBTQに関することを授業で取り入れるなど、周囲の知識を高める機会を設定する			
	当事者が自分を偽らずありのままの自己表現できる場・存在を設ける	理解啓発を図ることにより、周囲が適切な対応を取れる手法を提供する			
	性のありようやそのニーズの個人差について周囲に理解促進を図る	アライであることを発信するなど、当事者にとって心の拠り所となる存在を増やす			
	LGBTQに関する教育、啓発を行う				

## 本研究における社会的意義

本研究では、わが国の学校教育現場における LGBTQ の子ども達の権利や発達を守っていくためには、どのような学校ソーシャルワーク実践が必要かという課題を明らかにするために、わが国の LGBTQ の子ども達の支援に関する研究上の現状と課題を明らかにし、わが国の学校教育現場の支援実態の量的把握を行い、LGBTQ 当事者の学校教育現場におけるニーズの質的把握からその方法を検討してきた。

その結果、LGBTQ の子ども達は学校教育現場においてパワーの欠如につながる状況が多く存在し、これらの環境の改善にはエンパワメント視点での学校ソーシャルワーク実践が必要であることを明らかにした。また、具体的な実践モデルの提示を行なった。わが国では、LGBTQ へのソーシャルワーク実践に関する研究はほとんど行われてきていない。特に、パワーが欠如し、様々な二次障害を起こす前の早期支援の場として学校教育現場が有効であると考えられるが、学校ソーシャルワーク実践に関する研究は全く行われてきてこなかった。

今回、LGBTQ の子ども達へのエンパワメント視点に基づく学校ソーシャルワーク実践モデルを提示したことで、スクールソーシャルワーカーが現場で支援を展開する理論的基盤となると考えられ、実証的な研究も可能になると考える。これらの点において、本研究は独自性があり社会的に意義があるものと考えている。

## 論文審査の要旨

わが国では、2014(平成 26)年に、文部科学省が学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査を公表し、学校教育現場における LGBTQ の子ども達への支援が注目され始めた。しかし、わが国では LGBTQ に関する先行研究は多くはなく、LGBTQ の子ども達への支援に焦点をあてた学校ソーシャルワーク実践の研究も行われていない。

本研究では、①わが国において LGBTQ の子ども達を取り巻く環境を明らかにすること。②学校教育環境における支援の実態と課題を示すこと。③LGBTQ 当事者が実際に学校教育環境においてどのような困難を抱えていたのかを示すこと。これらの調査結果を踏まえて、④学校ソーシャルワークの必要性を検討すること。そして、⑤有効な支援モデルを検討することである。

以上の研究目的より、本研究の開拓的、独創的な点は次の通りである。

①LGBTQ の先行研究の文献分析より、LGBTQ の子ども達への学校ソーシャルワーク実践に関する研究がわが国では皆無であり、その研究の必要性を

明らかにしたこと。

- ②全国の小中学校，高等学校の養護教諭を対象とした量的調査にて，学校教育現場にはLGBTQの子ども達へのスティグマをはじめとした抑圧構造が存在し，子ども達のパワーの欠如につながっていることを示したこと。また学校教育現場の課題としては，学校全体としての支援が積極的にできていないことを明らかにしたことである。
- ③LGBTQ 当事者へのインタビュー調査から，学校教育現場に存在するネガティブなパワーとパワーの欠如をもたらす構図，学校教育現場においてLGBTQの子ども達を取り巻くパワーの関係性を明らかにしたことである。
- ④これらの調査結果に基づき，LGBTQの支援においてスクールソーシャルワーカーが持つべき知識と支援技術，エンパワメント視点における学校ソーシャルワーク実践モデルを提示したことである。

本論文の多くの章は，すでに学会発表，さらに査読付の学術研究誌（「社会福祉学」「学校ソーシャルワーク研究」）に論文として投稿し，3編が掲載されている。ゆえに，本論文は課程博士論文として十分評価できるものであるといえる。

### 審査結果の要旨

令和元（2019）年12月10日（火曜日）午後6時00分から午後7時00分まで久留米大学御井学舎249教室において開催された公開発表及び口頭試問及び同日午後7時00分より開催された審査委員会により，寺田千栄子氏の論文が博士（保健福祉学）の学位に値する研究であることを審査委員会は全員一致により確認した。